

douter の機能

——「うたがう」との比較をもとに——

福 田 由美子

0. はじめに

フランス語の **douter** は、次のような構文でもちいられることが知られている。

(1) Je doute de son succès. (*Le Robert Brio*)

(2) Je doute fort qu'il vous reçoive. (*ibid.*)

(3) Je doute si je partirai demain. (*Ac. 1878, TLF*)

(4) Une seconde, il douta de pouvoir continuer.

(Estaunié, *Ascension M. Baslèvre, 1919, p.293, ibid.*)

本稿では、**douter** の機能を解明することをめざす。**douter** については、複数の仏和辞典において、その第一義として「うたがう」が掲げられている。たとえば『ロワイヤル仏和中辞典』は、**douter de l'authenticité d'une signature** に「署名の真正さを疑う」という訳をあてている。しかし、多くの発話例を観察すると、**douter** の用法と「うたがう」の用法には違いがみられ、**douter** は「うたがう」を表す、とは断定できないということが分かる。

douter の機能の解明には、日本語の「うたがう」の機能と比較対照することが有益であるとおもわれる。以下では、まず **douter** と「うたがう」のそれぞれがどのような動詞であるかを、おもに辞書と **Franckel (1990)** の記述にもとづいて概観し、発話例を検討することによって⁽¹⁾、両者の共通点と相違点をあきらかにする。それを踏まえて **douter** の機能を考える。

1. *douter* の用法

1.1. 辞書の記述

Le Petit Robert では、*douter* について次のように記している。

- 1) Être dans l'incertitude (de la réalité d'un fait, la vérité d'une assertion).
- 2) Mettre en doute (des croyances fondamentales considérées comme des vérités).
- 3) Hésiter.
- 4) Ne pas avoir confiance en.

この記述から、1) は、現実である、真である、とされているものごとについて「確信のない」状態である。2) は、真とされている考えを「問題にする」ことである。3) は、「ためらう」ことである。4) は、だれかを「信頼しない」ことである。この記述によれば、*douter* は対象について「そうなのだろうか」と疑問を呈するときにもちいる動詞であることになる。

1.2. Franckel の分析

douter de, que X について、Franckel (1990, pp.141-142) は次のように述べている。

Je doute de la probité de Luc. は、Luc に誠実さがあるということを予め想定したうえで、彼の誠実さそのものを問題にしているという発話である。また *Compte tenu de l'heure, je doute qu'il arrive à temps.* は、彼が間に合うことを予め想定したうえで、時刻から判断して間に合わないのではないかと思っている発話である。つまり、*douter de X* や *douter que X* における X は予め想定されており、non-X の可能性と切り離すことができない。(たとえば「彼が間に合う」(X) には、「彼が間に合わない」(non-X) という反対の局面が同時に存在することを、主体は認識してい

る。)そこに **non-X** の可能性が導入されたとき（「時刻から判断すると」を指す）にもちいられる表現が **douter de X** や **douter que X** である。ただし、**non-X** は導入されたものであるので、**non-X** の方が **X** に勝る傾向が生まれる。

この考え方によれば、それぞれ「Luc の誠実さ（が本当かどうか）を疑う」、「彼が（間に合うと思っているが、本当に）間に合うかどうか疑っている」という意味に解釈される。

Franckel (1990, pp.141–142) はまた、次のようにも述べている。

主体にとって **X** という事態が存在するか否かが問題になるので、**douter de** は **X** が主体の内部にあること（主体が **X** だと思っていること）を対象とするのではなく、主体の外部ですでに想定されている **X** を対象にする。そのため **douter X** ではなく **douter de X** のかたちをとるのである。つまり、すでに想定されたものとして存在する **X** について (**de**)、その存在の有無を問題にする、という動詞が **douter** であると述べているのである。

2. 「うたがう」の用法

2.1. 辞書の記述

『日本語新辞典』は、「うたがう」の意味について次のように記している。

- 1) 本当にそのとおりなのだろうかと思う。また、その存在やあり方が不確か、または異常で信じられないと思う。
- 2) 物事について、悪い予想を立てる。また、悪事や犯罪にかかわりがあると思う。

ここで注目すべきは、2) の「予想を立てる」である。Franckel (1990) は、**douter** の対象は「すでに想定されたもの」とであると述べているが、『日本語新辞典』では、「うたがう」には「予想」の意味もあると述べられているのである。

2.2. 発話例の観察と **douter** との関係

douter は予め想定されたことである **X** に関して、**non-X** の可能性を問題にする動詞である。ところが「うたがう」というと、前項の 2) に「予想を立てる」と記されていることに着目すると、その対象となる **X** が予め想定されていなくてももちいることが可能なようである。そこで、『日本語新辞典』の記述をもとに、1) に当てはまるものを《タイプ A》、2) に当てはまるものを《タイプ B》と 2 つのタイプに分類して、「うたがう」の発話例を観察し検討する。

《タイプ A》

1) にあたる《タイプ A》は、信仰や経験、社会的通念などによって予め **X** が想定されているが、主体が **non-X** の可能性を感じたときの表現で、**douter** の用法と共通しているようにおもわれる。たとえば (5) では、主体は「神の存在」を信じているのであるが、何らかの問題が起こり、信じられない気持ちが生じたときの発話である。これらのパラフレーズの文頭には「本当に」をそえることができる。それは、「本当に」が予め想定されていた **X** の存在をあらためて吟味する指標となっているからである。

- (5) 私は神の存在を疑う。……(本当に) 神が存在しているのかどうかあやしく思う。
- (6) 私は彼の忠誠心を疑う。……彼に忠誠心があるのかどうかあやしく思う。
- (7) 私はその情報の信憑性を疑う……その情報が確かなのかどうかあやしく思う。

(8) 私はこの薬の効能を疑う……この薬が効くのかどうかあやしく思う。
これらの発話の内容をフランス語で伝えるときには、(5')-(8') のように **douter de X** をもちいることができる。それは予め **X** が想定されているからである。

- (5') Je doute de l'existence de Dieu.
- (6') Je doute de sa loyauté.

(7) Je doute de l'authenticité de cette nouvelle.

(8) Je doute de l'efficacité de ce remède.

《タイプ B》

2) にあたる《タイプ B》は、データなどの判断の材料によって、主体に「うたがう」対象となる X の存在が新しく構築されたときの表現である。たとえば (9) では、犯人が誰であるかを追求するうちに、「彼が犯人である」という可能性が生じたときの発話である。また、これらのパラフレーズの文は、「ひょっとして」と相性が良い。それは、「ひょっとして」が新しい概念の導入の指標になっているからである。

(9) (証拠から判断して) 私は彼の犯行を疑う。……(ひょっとして) 彼が犯行を犯したのではないかと思う。

(10) (症状から) 医者は盲腸を疑う。……盲腸なのではないかと思う。

(11) 妻は夫の浮気を疑う。……夫が浮気をしているのではないかと思う。これらの発話の内容をフランス語で伝えるとき、(9'), (10'), (11') のように *douter de X* はもちいることができない。なぜなら、「うたがう」の対象となる X が予め想定されていたものではなく、初めて導入された新しい概念であるからである。

(9') *Je doute de son délit.

(10') *Le médecin doute de l'appendicite.

(11') *La femme doute de l'infidélité de son mari.

このような場合にはフランス語では、(9''), (10''), (11'') のように、*souçonner* や *se demander* 等をもちいて伝える。

(9'') Je le soupçonne. / Je me demande si ce n'est pas lui qui a commis le délit.

(10'') Le médecin se demande si ce n'est pas une appendicite.

(11'') La femme soupçonne son mari de la tromper.

2.3. 「うたがう」と副詞

ただし、《タイプ A》は「本当に」以外に、次のように「ひょっとして」を

そえた表現も容認されている。

(12) 私は神の存在を疑う。……ひょっとして神が存在していないのでは思う。

(13) 私は彼の忠誠心を疑う。……ひょっとして彼に忠誠心がないのではと思う。

(14) 私はその情報の信憑性を疑う。……ひょっとしてその情報が確かでないのではと思う。

これらの文は対話者間の共通認識として、(12) では予め主体に「神が存在する」、(13) では「彼には忠誠心がある」、(14) では「当該の情報は確かである」という考えがあるときの発話である。「ひょっとして」は新しい概念の初めての導入の指標となるだけでなく、主体のなかにある概念とは別の概念がわからずかでも生じたことを伝えることもできる副詞なのである。よって、「ひょっとして」は《タイプ A》と《タイプ B》を見分ける指標にはならない。

3. 「うたがう」と **douter** の機能

3.1. 「うたがう」の機能

《タイプ A》の用法では **non-X** が、《タイプ B》の用法では **X** が、主体にとって望ましい事がらではなさそうである。たとえば《タイプ A》の(8)では、「薬が効くこと」が **X** であるから、主体は「薬が効かないこと」(**non-X**)を思い、**X** に確信をもつことができない。いっぽう《タイプ B》の(10)では、「盲腸であること」が **X** なので、**X** そのものが問題になる。ここでは(10)の発話が医者によるものであると考えているので、**X** に関して心理的には中立ということもありうるが、もし患者自身が「(自分が)盲腸であることをうたがう。」と発話すれば、心理的には望ましくないことである。しかし、誰の発話であれ、病気であること自体が正常から逸脱していることなので、問題であるにとらえることができる。

このように、これまでに挙げた発話例では、「うたがう」は望ましくない事

がらについて述べるときにもちいられるような印象をうける。ところが、実際には (15) のような発話も容認されている。この例は、「彼」の「無罪の判決」に対して主体が「そうなのだろうか」と思っている、《タイプ A》に属する発話であるとする。

(15) 私は彼の無罪をうたがう。

このばあい、「彼の無罪」そのものは喜ばしいことであるが、過去にさまざまな犯罪を重ねてきた「彼」なのだから「きつと有罪だ」と思っている主体にとって、「彼の無罪」の提示は、信念が覆される「問題」である。

また (15) は《タイプ B》のケースでの発話にももちいられる。つまり「彼の有罪」が確定していて、主体が「無罪の可能性があるのではないか」と思ったときである。そのばあいは、「有罪の判決」に「問題」を呈することになる。

なにごとにも起こらず事態が順調で、主体が「うたがう」余地もないときには、新しい概念は生じない。しかし、「本当に」や「ひょっとして」の気持ちが主体のなかに生じたときに、それを伝えるのが「うたがう」なのである。予め X が想定されているか否かは、「うたがう」には関係がない。「うたがう」を発話するときは常に、X の真偽が問題となるときなのである。そして、多くの場合、望ましくない事がらを述べるときである。

3.2. *douter* の機能

3.2.1. 語源と変遷にもとづく考察

Dictionnaire Historique de la Langue Française の記述をもとに、*douter* の語源と変遷を以下のように考察する。

古フランス語期 (9 世紀頃から 16 世紀頃まで) には、*douter* は *craindre* 「恐れる」という意味にもちいられていた。それは、*douter* の語源に起因する。*douter* の語源は、*deux* をあらわすラテン語 *duo* から派生した *dubitare* で、その意味は *hésiter entre deux choses, être indécis* 「二つのことがらのあいだで決められずに迷う」である。

われわれは *dubitare* の *duo* に着目し、*douter* の本質は、「主体が二者択一をしなければならない」ことであると考ええる。

さらに、人間は二者択一を課されて迷いが生じたとき、自分にとって都合の悪い方を考えてしまいがちである。そこで生じる「恐れ」や「不安」が、古フランス語期に *douter* の意味となって定着したと推測できる。古フランス語期の *douter* は、ラテン語の *dubitare* の含意する「迷う」の知的な部分よりも、感情的な部分を担っていたのである。

11 世紀頃になると、「恐れ」や「不安」をいっそう強めて伝えるために、*douter* に強調の接頭辞 *re-* をつけた動詞 *redouter* がもちいられるようになる。やがて 16 世紀頃には、*douter* は知的な、*redouter* は感情的な動詞としての役割分担ができ上がり、現在にいたっている。

こうして *douter* の変遷を概観すると、感情的な部分を *redouter* に譲ってしまった *douter* は、おもに望ましくないことを対象とする「うたがう」とは、機能の面では異なった動詞であることが推測される。

実際に *douter* がどのようにもちいられているのかを見てみることにする。

3.2.2. 発話例の観察

ここでは *douter de X* (名詞あるいは名詞相当句) および *douter que X* (節) をあつかう⁽²⁾。

インフォーマント⁽³⁾によると、(16) については 2 とおりの解釈が可能であるようだ。ひとつは、「もうすぐ実施されるテストに、彼が合格するとは思っていない」で、もうひとつは、「すでに実施されたテストの結果は知らないが、彼が合格しているとは思わない」である。(17) は (16) の前者の意味と同じであり、(17) は (16) の後者の意味である。テストであるから、その結果は合格 (X) あるいは不合格 (non-X) の二つの可能性があることを主体は認識しているのであるが、要は、主体が non-X の可能性があると考えていることを伝えているのである。テストの実施が未来か過去かの違いは、発話状況によって対話者間ではじゅうぶん理解できる。

(16) *Je doute de son succès à ce concours.*

(17) Je doute qu'il réussisse à ce concours.

(17') Je doute qu'il ait réussi à ce concours.

以下の(18)と(19), (20)と(21)に関しても同様である。前者は「薬が効かない」こと, 後者は「友情に欠ける」こと(つまり **non-X**)を断言はできないが, そうなのではないかという思いが強い, という意味である。

(18) Je doute de l'efficacité de ce remède.

(19) Je doute que ce remède soit efficace.

(Flaub., *Corresp.*, 1874, p. 163, *TLF*)

(20) Je doute de son sens de l'amitié.

(21) Je doute qu'elle ait de l'amitié pour moi.

つぎの(22)と(23)の2例は, フランスのルノー社が, 幹部3人を産業スパイ容疑で解雇した事件の二ヶ月後の記事の見出しである。その内容は, スパイ容疑で解雇したものの調査しても証拠が見つからず, 実はスパイ行為はなかった可能性が浮上してきた, というものである。

(22) Pelata reconnaît «douter» de la thèse de l'espionnage

(*Libération*, 2011.3.4.)

(23) Renault : la direction "doute" qu'il s'agisse d'espionnage

(*Le Monde*, 2011.3.4.)

つぎの2例は, (24)が見出しで(25)はその記事の冒頭である。(24)の *l'avenir économique* の内容は, (25)で「政府が経済の回復を見込んでいる」という前置きをしたうえで, *une amélioration de la situation économique* であると説明し, 「フランス人の4分の3が経済の先行きを危ぶんでいる」ということを伝えている。

(24) Les trois quarts des Français doutent de l'avenir économique

(*Le Monde*, 2010. 5. 17.)

(25) Alors que le gouvernement espère une reprise de la croissance cette année, les trois quarts d'entre eux en doutent : 77% ne croient pas à une amélioration de la situation économique alors

que 20% seulement se montrent confiants. (*ibid.*)

つぎの (26) は、1975 年に始まった「国際婦人デー」の効用について、サルコジ氏が疑問を呈している、という内容の記事の見出しである。

(26) Nicolas Sarkozy doute de l'utilité de la Journée de la femme
(*Libération*, 2011. 3. 8.)

これらの例を観察すると、とくに (22) – (26) においては、*douter* が主体の外部で予め想定されている X を対象にしていることが明らかである。

3.2.3. 「うたがう」との比較にもとづく考察

前章の 2. 2. では、「うたがう」を 2 つのタイプに分類し、《タイプ A》は *douter* をもちいて伝えることが可能で、《タイプ B》は可能ではないと記した。しかし、《タイプ A》の「うたがう」と *douter* は、本当に同じ内容を伝えているのであろうか。

Franckel (1990, pp.141–142) の分析にもとると、「*douter de X* や *douter que X* における X は、予め想定されており、non-X の可能性と切り離すことができない」、 「X が主体の内部にあること（主体が X だと思っていること）」を対象とするのではなく、主体の外部ですでに想定されている X の存在の有無を対象にする」と述べられている。つまり、X は主体の「おもい」とは関係なく想定されており、それに対して主体が non-X の可能性があると考えるとき、*douter de X* / *douter que X* をもちいて伝えるということである。

たとえば、「うたがう」をもちいた発話例の (7) 「私はその情報の信憑性を疑う。」は、発話主体である「私」が「その情報」に関して「信憑性がある」と思いながらも、「本当にそうなのだろうか」と自問しているという内容をあらわす。X にあたる「その情報の信憑性」は主体の内部にあることでも、外部ですでに想定されていることでもかまわない。X に対して主体が少しでも non-X の可能性を感じたら、「うたがう」をもちいることができる。

ところが *douter de X* の X は、主体の外部で想定されていることであるから、(7) の *Je doute de l'authenticité de cette nouvelle.* は、「その情報は確かである」という事実がすでに提示されており、何かのきっかけで、それに対

して主体が「そうではないのではないかと疑問を呈しているという内容で、主体の考えのなかで **non-X** の可能性が **X** を超えたとき、はじめて **douter** をもちいることができるのである⁽⁴⁾。

つまり、(7) と (7') のように同じ意味に解釈しても問題ないケースというのは、あくまでも結果であり、その出発点は異なっているのである。(16) – (26) の例についても同様、「うたがう」と翻訳しても差し支えなさそうであるが、出発点の相違を伝えることはできない。

4. **douter** と「うたがう」の比較

douter の語源 *dubitare* の意味は、*hésiter entre deux choses* 「二つのあいだで迷う」であるが、それだけにとどまらず、主体が「二者択一を課される」という意味をもつ。「二者」とは **X / non-X** の相反する事がらである。いっぽう「うたがう」は、「迷う」の意味を含む⁽⁵⁾が、「二つのあいだ」であるとは断言できない⁽⁶⁾。

また、「うたがう」は主体の内部で構築されている事がらでも、外部で想定されている事がらでも、さらに新しく導入された事がらでも対象とすることができ、また主体が少しでも「本当にそうだろうか」と感じればもちいることができるが、**douter** は主体の外部で予め想定された事がらだけを対象 (**X**) とし、主体の考えのなかで **non-X** の可能性が **X** を超えたときにもちいられる動詞である。

さらに、**douter de X** における **X** の時制は対話者間では重要でないこと、および **douter que X** における **X** に接続法をもちいることから、**douter** は、主体が **X** をひとつの事がらとして提示するだけにとどめ、**X** よりも **non-X** の可能性の方を考えているという事実を伝える目的でもちいられる動詞であることがいえる。

また、「うたがう」は主体にとって望ましくない事がらや問題となる事がらを対象とする傾向が強い動詞であることから、主体による感情移入が起こりや

すいが、**douter** は、予め想定されている事がらを問題とする動詞であるので、発話のなかに感情が移入されているか否かは文脈による。

これらのことから、**douter** を「うたがう」の一辺倒で済ませることはできないのは明白だといえる。仮に「うたがう」という訳語が当てはまるとおもわれるケースであっても、その出発点が同じかどうかを確かめる必要があるのである。

5. おわりに

本稿では、**douter** の機能を解明するためのひとつの手段として、「うたがう」との比較対照をこころみた。これによって、「うたがう」と安易に解釈されがちな **douter** は、たしかに共通する概念も含んではいるが、「うたがう」とは出発点を異にする動詞で、その用法にも違いがあることがはっきりした。さらに **douter de X** と **douter que X** の使い分け⁽⁷⁾によるアプローチをこころみたなら、さらに **douter** の機能がはっきりするであろう。それを今後の課題とする所存である。

注

- (1) 発話例のうちで出典を記していないものは、関西学院大学教授オリヴィエ・ビルマン先生の協力を得て、われわれが作成したものである。
- (2) **douter si X** と **douter de inf.** に関しては、それらは古い表現で、文学作品の中での表現であると *TLF* に記されており、われわれが目にした資料においても、辞書以外では見当たらなかったもので、ここではふれない。
- (3) オリヴィエ・ビルマン先生。
- (4) 発話レベルにおいてである。つまり、主体のなかに **non-X** が生じ、主体自身が **non-X** が **X** を超えていると判断するとき、**douter** をもちいて発話するのである。
- (5) 「うたがう」に充てている「疑」という漢字の成り立ちは、「人が杖をつき、あちこち見回して、どちらに行こうかとあちこち迷っているさま」であると、『漢字典』には記されている。
- (6) 医者が「盲腸をうたがう」と発話するとき、盲腸だけではなく他の病名の可能性も念頭に入れながら発話しているとも考えられる。

- (7) インフォーマントによると、*Je doute qu'il réussisse à ce concours.* は *Je doute de son succès à ce concours.* といえる。*Je doute que ce remède soit efficace.* も *Je doute de l'efficacité de ce remède.* といえる。ところが *Je doute qu'il vienne.* は ?*Je doute de sa venue.* とはいいいにくい。さらには *Je doute que mon fils téléphone.* は **Je doute d'un coup de téléphone de mon fils.* とはいえない。このようなことから、対象である X をさらに分析し分類することは、有益であるとおもわれる。

主要参考文献

- 小和田顯ほか (2001) : 『漢字典』, 旺文社.
 曾我祐典 (1999) : 「〈se + douter〉の機能」, 『人文論究』第 49 巻第 1 号 (関西学院大学文学部), pp.21-33.
 田村毅ほか (2005) : 『ロワイヤル仏和中辞典』, 旺文社.
 松本栄一 (2005) : 『日本語新辞典』, 小学館.
 吉田精一・時枝誠記 (1983) : 『角川国語大辞典 蔵書版』, 角川書店.
 Drivaud, Marie-Hélène (2011) : *Le Petit Robert*, Dictionnaires Le Robert.
 Flobert, Pierre (2001) : *Le Gaffiot de poche, Dictionnaire latin-français*, HACHETTE.
 Franckel, Jean-Jacques (1990) : “douter”, *Les figures du sujet*, Ophrys, pp.141-142.
 Guillaume, Gustave (1973) : *Langage et science du langage*, Librairie A.-G. Nizet / Presses de l'Université Laval Québec.
 Rey, Alain (1992) : *Dictionnaire Historique De La Langue Française*, Dictionnaire Le Robert.
 Rey-Debove, Josette (2004) : *Le Robert brio*, Dictionnaires Le Robert.
 Stéfani, Jean (1962) : *La voix pronominale en ancien et en moyen français*, Ophrys, pp.117-118.

インターネットサイト

Le Monde. fr.

Libération. fr.

Le Trésor de la Langue Française, Informatisé (TLF).